

今月はいつもにまして、発見をうながされたり驚きを感じたり。世界の見方や対象との相対し方にはっとさせられるような作品が多かったように思います。

またたくま
見慣れたきのう
盗まれて
終電のない
新世界きた

佐藤 美貴子

終電を逃したときにこんなふうに思えたら素敵だなと思いました。日常と地続きのところにもうひとつの世界があって、「きのう」から“今日”へと日づけが変わる瞬間に、ふっといざなわれてしまうかもしれない。現実的には困った事態でしかないことに違う価値を見いだすことができる気がして惹かれます。

空き缶を捨てるみたいに手を離す ベロニカ

「空き缶を捨てるみたいに」。そう言い切ってしまうなければ「手を離」すことができない心のありようを感じました。きっと空き缶のように忘れることはできない。手を離れた記憶とともに人生は続いてゆく。

授業中
窓ガラスを割ったら
みんな笑った

うすしか

語り手は「みんな」を笑わせようと思って窓ガラスを割ったわけではないはず。虚しい行為をさらに虚しくさせるずれにガラスが刺さる以上の痛みの存在を感じるとともに、なにかを踏み越えかけているのは窓ガラスを割った人物ではなく笑っている「みんな」のほうだと怖ろしさも感じました。

憂鬱はそこら中にいて
僕らが縄張りを
侵したのかもしれない

佐々木佑輔

「憂鬱」の擬人化、輪郭のもたせ方が斬新です。同じ作者による「よく見て／針の先は丸い」は希望的な発見の詩で、どちらの作品も世界とのやわらかな接し方に惹かれました。

トンネルに迷い込んだ蝶
一方向へ高速で流れる時を
ふにやりと
たわませ彷徨う

春町 美月

トンネル内の蝶に時間感覚をとらえる感受の鋭さ。トンネルに入れば出口へ向かうもの。その「一方向」の人間の「時」に一石を投じるかのような「蝶」の存在。世界の枠がゆるゆると解体されてゆくような心地よさを感じます。

思春期の入り口に立つ
五年生 娘はウフフと
笑うようになり

加藤 美紀

「娘」の「思春期の入り口」への気づきが「ウフフ」という笑いというところに愛情あふれる母のまなざしが感じられます。母とはこんなふうに娘のことを見抜いているものなのですね。

眠れない夜の風のために
敷かれた道いつも雪が降っている

真島

つねに「雪」によって清められ誰にも何にも侵されない場所がどこかに確かに存在している。そのことを信じられるような作品です。

電源を切っても
赤いランプのついたテレビ
そんな感じの朝早く

藤色

自身の中にある自分にも説明のつかない心の状態もしくは肉体感覚が表されているのでしょうか、ほぼ誰もが目にしたことのある「電源を切っても／赤いランプのついたテレビ」がこんなふうに詩になるとは。

この世界のどこかに昇る朝日で
わたしは覚悟の檸檬を搾る

宇井 麻千

今ここは夜でも、必ず「世界のどこか」しらで「朝日」が昇っている。その朝日を思うことは、勇気をふりしぼることを可能にし、この世を能動的に生き抜く気力につながるることができるのですね。

堤防に

ふたりで腰掛け海を見る

何処までが

幻なのかな

世界は

桜望子

「何処までが」「現実」ではなくて「幻なのかな」にはっとさせられました。世界に対する心の揺らぎが目の前に広がる海の揺らぎと重なって伝わってきます。

八つ折りにしていた

空の地図を広げたような空

宇井 麻千

縮こまっていた心が開放されるように広がる空。同じ作者の同じく空の詩「秋のボリュームが／徐々に大きくなる／スピーカーみたいな空」も、秋に特徴的な雲が増えてきたのかなとか秋から鳴きはじめる鳥の声が多くなってきたのかなとかいろいろ想像して楽しくなりました。

知らない人の知らない人

であるところの私

列車はかすかに揺れている

真島

電車では知らない人同士が同じ方向へ向かっており、同じ空間と時間を共有している。個のままでありながら、運命共同体であることの不思議さを思いました。

好き嫌いの

間ばかりが世にあって

色とりどりな

学生の傘

桜望子

好きな人を嫌いになったり嫌いなものを好きになったり、人の心の不思議を思うと確かに世には「好き嫌いの／間ばかり」があるのかもしれません。「色とりどりな／学生

の傘」が、白か黒かにはあてはめることのできない人間の複雑な心のありようと呼応しています。

白い菊母の匂いのしない母

亀山こうき

肉体はそこにあっても「匂い」はもう魂とともにあちら側の世界へと連れ去られている。切り花であるがゆえに命の際にある「白い菊」に囲まれた「母」。死に直面したく私>のかなしみが深く伝わってきました。

浦歌無子